

加藤清正の実像

はりまのくに ちまのくに いなばのくに
播磨国・但馬国・因幡国3か国を平定した秀吉軍は、さらに兵を西に進め、毛利氏の東の
防衛ラインである備中国(現在の岡山県西部)へ侵攻します。秀吉は主君・信長の天下統一
戦争を着実に遂行していきました。

〈4〉秀吉の天下取り

中国方面の平定を任されている秀吉は、天正10年(1582)に入ると備中国攻略に取り掛かります。4月14日には備中国に向けて軍を進め、5月初旬にかけて毛利氏の「境目七城」と呼ばれる軍事拠点^{あし}を次々と陥れます。残すは清水宗治が守る高松城。こうして「水攻め」で有名な高松城の攻防戦が開始されます。5月7日に高松城を包囲した秀吉軍は、近く^{あし}の足守川を堰き止め、その水で城の周囲を水没させて城を孤立させる兵糧攻めをおこないます。結果として6月4日に清水宗治が降伏したことで高松城は秀吉軍の手に落ちますが、実は前日の夕方に秀吉は、自身の運命を大きく変えることになる大事件の知らせを受けていました。6月2日未明に京都で起きた本能寺の変です。変の知らせを受けた秀吉は、毛利氏陣営が変の情報をキャッチする前に講和を結び、毛利氏撤兵後の6日に軍勢を率い上方方面に急行します。世に言う「中国大返し」です。2万を超える秀吉軍は驚異的なスピードで進軍し、200キロあまりの距離をわずかに6日間で踏破したと言われています。6月12日に畠田(現在の大阪府高槻市)に到着した秀吉は、池田恒興や高山右近らと軍議を開き、翌日夕方より山崎(現在の京都府大山崎町付近)で明智光秀軍との戦端が開かれました。この山崎の戦いは、圧倒的な兵力を誇る秀吉軍の圧勝に終わり、これにより秀吉は、信長亡き後の天下取りレースで頭一つ抜け出します。

さて、ここまで本能寺の変前後の秀吉の動向を見てきましたが、清正の動向にも目を向けてみましょう。先の「境目七城」の一つ冠山城^{かんざんやまじょう}を攻めた際、清正は一番槍の高名を挙げ、秀吉から感状^{かんじょう}を与えられています。「清正記」などの伝記類にし

ばしば引用されているこの感状ですが、日付や文章を見ると明らかに偽文書だとわかります。しかし偽文書とはいえ、清正が秀吉に従い、備中攻めに参戦したことは間違いないでしょう。また、江戸時代中頃に成立した「絵本太閤記」というイラスト入りの読み物には、「中国大返し」での秀吉と清正のエピソードが見られます。一刻も早く上方へ戻りたい秀吉は、1人軍勢を飛び出します。近習^{きんじゅう}※の清正や福島正則らは、懸命に追い掛けますが秀吉を見失ってしまいます。その後秀吉は敵方の兵から逃れるため、頭を丸めて僧侶^{ぶんに}に扮し、とある寺院に身を隠します。ようやく秀吉の所在^{あつ}を突き止め、秀吉に面会した清正らがその姿を見て呆気にとられるシーンです。秀吉の剽軽さを誇張するための創り話ですが、清正が秀吉の「中国大返し」に従って上方へ駆け上ったことは確かでしょう。

秀吉の天下取りにとって大きなターニングポイントとなった天正10年。もちろん秀吉に従う清正にとっても自身の将来を左右する激動の年でしたが、残念ながら清正の詳しい動向については不明な点が多いです。20歳を過ぎたとは言え、まだまだ部隊を率いる武将と呼べるほどの地位にはなく、秀吉が抱える近習衆の1人に過ぎなかった清正の名前は、当時の史料にはなかなか見出せません。

伝記や小説の世界ではこの時期の清正について、多くの逸話が語り継がれていますが、どれも当時の史料に基づいたものではなく、後世に創作された話のようです。

※「近習」…主君のそばに仕える者

このコーナーは、大浪 和弥さん(元熊本博物館学芸員)が執筆しています。

